

2019年産「アルプス米」てんたかく・てんこもり栽培こよみ (JA米)

高温に強い品種の導入による作期分散!

アルプス農業協同組合
アルプス農協管内農業技術者協議会

てんたかく

収量構成の目安 (560kg/10a)

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	450	㎡当たり着粒数(粒)	29,000	玄米千粒重(g)	22
1穂着粒数(粒)	65	登熟歩合(%)	88		

4月 5月 6月 7月 8月 9月

育苗期 5/5 田植え 活着期 有効分けつ期 無効分けつ期 幼穂形成期 穂ばらみ期 7/22 登熟期 8/26

作業日程の目安: 5/5 田植え (浸種 3/31, 播種 4/12, 搬出 4/15) → 5/5 田植え → 5/27-31 溝掘り → 6/5-10 中干し → 6/29 穂肥① → 7/5 穂肥② → 7/22 防除① → 7/22 出穂 → 7/22 防除② → 7/22 防除③ → 8/19-21 落水 → 8/26 刈取り

管理のポイント: 土づくり (秋施用ができた場合は、土づくり資材を確実に施用する。), 耕起・代かき (代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。), 健苗育成 (田植え時期に応じた計画的な育苗を行う。), 溝掘りは確実に (活着後は、浅水管理をする。), 中干しは適期に開始 (中干しは強すぎないように注意する。), 幼穂形成期から飽水管理 (6/20頃に「エスアイ加里」または「種酸加里」を施用する。), 草刈りの徹底 (7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。), 防除の徹底 (生育ステージに合わせて防除を実施する。), 収穫までの水管理 (刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水を行う。), 適期収穫 (フェーン時はあらかじめ入水する。), 適正な乾燥調製 (粗黄化率85~90%頃に刈り取る。), 土づくり (稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。)

溝掘りと田植え1か月以内の中干し開始

○中干しが遅れると、弱勢分けつが多く発生したり、根が少なくなり品質が低下しますので田植えの1か月以内を目安に、遅れないよう中干しを開始する。

○中干し開始前には、圃場全体へ排水を短時間で均一に行うため、溝を設置する。

適正な中干し: 葉が直立、茎が太い、根量が多い

中干し未実施: 下葉が枯れる、茎が細い、根量が少ない

除草剤散布は遅れずに 雑草防除体系

5cm程度の水深を確認する。除草剤散布後7日間には落水やけし流しをしない。

初期除草剤の適正使用: ①代かきから田植えまでの日数を長くしすぎない。②軟弱苗の使用や極端な浅植えを避け、適切な水管理を行う。③葉害軽減のため、初期除草剤マージェット1キログラムは移植後3日以降の使用とする。④田植同時除草剤は、葉害を受けやすいことから、上記①を守り田植後の入水をゆるやかに進行。

カメムシ防除の徹底で被害を防止!!

基本防除を適期に行い、防除間隔は7日間を目安とする(10日以上あけない)。

畦畔等のイネ科雑草の穂が出る前までに草刈りを行う。

麦跡等の不作付地は、大豆、園芸作物、緑肥等の栽培を行う。

飼料用米や飼料用稲では、主食用米の栽培圃場に準じて水田や畦畔の除草を行う。

病害虫防除体系: ルーチンアドスピノ箱剤 (50g/箱) 播種時(穂土前) ~ 移植当日。Dr.オリゼフェルテラ剤 (50g/箱) 緑化期 ~ 移植当日。エパーゴルフワイド箱剤 (50g/箱) 播種時(穂土前) ~ 移植当日。

てんこもり 施肥基準 (5/10植え)

土壌区分: 砂壌土 (45), 半湿田黒ボク土 (40), 粘質土 (35)

基肥一発体系: 基肥206 (45), 基肥555 (40)

分施肥体系: 基肥 (40), 穂肥 (13)

追肥: 10, 12

てんこもり

収量構成の目安 (600kg/10a)

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	450	㎡当たり着粒数(粒)	31,000	玄米千粒重(g)	22.5
1穂着粒数(粒)	70	登熟歩合(%)	85		

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月

育苗期 5/10 田植え 活着期 有効分けつ期 無効分けつ期 幼穂形成期 穂ばらみ期 7/14 登熟期 8/6 成熟期 9/20

作業日程の目安: 5/10 田植え (浸種 4/8, 播種 4/18, 搬出 4/21) → 5/10 田植え → 6/3-5 溝掘り → 6/10-15 中干し → 7月上旬 一斉草刈り → 7/14 穂肥① → 7/24 穂肥② → 8/6 防除 → 8/6 出穂 → 8/6 防除① → 8/6 防除② → 9/13-15 落水 → 9/20 刈取り

管理のポイント: 土づくり (秋施用ができた場合は、土づくり資材を確実に施用する。), 耕起・代かき (代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。), 健苗育成 (田植え時期に応じた計画的な育苗を行う。), 溝掘りは確実に (活着後は、浅水管理をする。), 中干しは適期に開始 (中干しは強すぎないように注意する。), 幼穂形成期から飽水管理 (6/20頃に「エスアイ加里」または「種酸加里」を施用する。), 草刈りの徹底 (7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。), 防除の徹底 (生育ステージに合わせて防除を実施する。), 収穫までの水管理 (刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水を行う。), 適期収穫 (フェーン時はあらかじめ入水する。), 適正な乾燥調製 (粗黄化率85~90%頃に刈り取る。), 土づくり (稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。)

積極的に利用しましょう!
高品位・低コスト生産にコントリビューターを